



## “医療の質”と医師数、 砂川市立病院の現状

空知医師会 副会長  
砂川市立病院 副院長  
湊 正 意

空知医師会は会員数118名のうち90名、76%が砂川市立病院所属という、おそらく全国でも稀な構成となっている郡市医師会である。私は空知医師会副会長かつ砂川市立病院副院長というつがい目のような立場にあるのだが、開業医の先生方と大多数を占める勤務医が阿吽の呼吸で仲良く勉強し支え合っている姿を見るのは、内部の人間が言うのもどうかと思うが、なかなか気持ちの良いものである（実に日本的ではあるが）。互いにないものを与え合う、相補的で成熟した医師会と言えるだろう。

医師数の話が出たので、中空知という過疎地にある病床数506床、医師数90人という病院についてどう評価すべきか、考えてみる。

いつの頃からか私は、500床の病院で患者・職員が共に納得（この言葉は当院小熊院長が掲げる病院のモットー）の医療を展開するためには最低100人の医師数が必要と思うようになっていた。分かりやすく言えば、5床当り1人（以下これを1とする）ということだ。当院は今年の4月現在0.89、ただし病床当たりの医師数が少ない精神科を除かせてもらうと1.02。いつの間にかぎりぎり1を超えていたのである。

昨年度の「病院名鑑」を調べてみると、道内の大学病院を除く300床以上の急性期病院で札幌市内の平均は1.16、札幌市以外の平均では0.65であった。札幌市以外の病院で当院は4番目にあたる。ちなみに全国平均は0.75（とある病院のHPから拾ったので根拠不明）、聖路加国際は何と3.08、国立国際医療研究センターは2.89である。

また道内トップの手稲溪仁会をはじめ、虎の門、国立東京医療センター、亀田総合、倉敷中央など全国に名を馳せる病院はほぼ1.9前後に並んでいるのが興味深い。1.9だと500床で190人である。軽く目まいに襲われる。医師不足にあえぐ地域の多くの病院の存在を承知であえて言うが、真に“納得”の医療を目指すには1ではまだ全然足りないのが現場の実感である。医療の質の向上のためにやりたくてもできないことが多過ぎる。



## 小樽市医師会現況

小樽市医師会 理事  
おたるイアクリニック 院長  
鈴木 敏 夫

小樽市医師会は平成25年4月より一般社団法人となり同時に津田哲哉会長が3期目として執行部を率いている。新理事として市立小樽病院院長代理である近藤吉宏先生、小樽協会病院院長である柿木滋夫先生が参加された。

本年7月11日には現在、済生会小樽病院に併設されている小樽市夜間急病センター（小樽市からの委託で医師会が運営）が、独立移転新築され運用を開始する予定であり、また8月1日からは、済生会小樽病院が築港地区に移転新築され診療を開始する予定である。平成26年秋には、現在の市立小樽病院および小樽市立脳・循環器・こころの医療センター（旧第2病院）が統合され現在の市立小樽病院の隣に新市立病院として開業予定である。

以上のように、この2年間で小樽市内の医療環境が大きく変化することになる。医療センター、済生会病院および夜間急病センターは現在すべて、市内の北西部にあるが、それらが南東部に移転することになる。小樽市は余市に接する蘭島（西部）から札幌に接する銭函（東部）まで東西に長く位置（約36km）しており主に西部の住民の通院の問題が生じると考えられる。

一方、国立社会保障・人口問題研究所の発表によると現在128,405人の人口（平成25年3月末）が平成40年には73,841人まで減少するとされており高齢化率は45.4%まで上昇すると推計されている。平成10年との比較では、44%の人口減少が予想されており、道内平均予想である24%を大きく上回る。昭和39年の207,093人をピークとして、人口の市外への流出および出生数減少に歯止めがかからず有効な施策が見当たらない状態である。

小樽市は日本がこれから直面する急速な人口減少および超高齢化にすでに直面しており、当医師会はそれらに対応すべく奮闘している。